

RSSフィードのビジネス最新動向

小川 浩 ● 株式会社モディファイ CEO 兼クリエイティブディレクター

ビジネスモデルの決定打確立が普及の鍵 当面は広告や配信代行などで収益を狙う

RSSフィードの市場性

RSSフィードとは何か。簡単に言うと、HTMLではなくRSSによるウェブ配信のことだ。通常のウェブサイトはHTMLという記述形式によるデータ配信およびそのトラフィックだが、HTMLの代わりにRSSあるいはAtomというフォーマットのデータ配信・トラフィックが、RSSフィードなのである。

ブログやニュースサイトの更新情報として一般に認知され始めたRSSフィードだが、現在ではほとんどのニュースサイトやECサイトなどが、最新記事や製品情報などを、通常のウェブページと同時にRSSフィードによって配信するようになってきている。そのためブログのトラフィックとRSSフィードはいまや別の配信情報と考えていいだろう。

RSSやAtomそのものは、ウェブサイト内の新着記事の一覧や各記事の更新日時、本文の要約などを記述するためのXMLフォーマットのことだ。XMLフォーマットのコンテンツは従来のウェブブラウザでは表示することができず、フィードリーダーもしくはRSSリーダーと呼ばれる専用のビューワーソフトを使って閲覧する必要がある。

フィードリーダーには、クライアントソフト型と、ブラウザ上で利用できるウェブ型とがある。どちらの形式のフィードリーダーも、一般的ユーザーの間ではわずか7～15%ほどの利用率で、しかもこの2、3年はその普及速度も落ちてきている。RSSフィードの配信数自体は急増しているものの、閲覧者数の伸びが鈍化していることから、フィードビジネス市場の存在やビジネスモデルの事業性を疑問視する声も多くなっていた。

しかし2008年現在、ほとんどの最新ウェブブラウザがフィードリーダー機能を標準装備するようになったため、今後はRSSフィードのトラフィックも急速に伸びていく可能性が出てきた。

しかも、iGoogleやMyYahoo!のようにユーザーが自由に購読する記事を選択できるいわゆるパーソナライズドポータルが、実質的にフィードリーダーとしての機能を取り込んでいる。RSSやAtomは、すでにHTMLと変わらないほど高い可読性を持つデータフォーマットになっている

のだ。

今後、RSSフィードが本当に普及するかどうかは、増大するRSSフィードのトラフィックをどうマネタイズするか、というビジネスモデルの確立にかかっていると言っていいだろう。

RSSフィードビジネスの国内市場

まず、国内におけるRSSフィードビジネスの種類と代表的なプレイヤーをそれぞれ挙げていこう。

① RSS広告市場

RSSフィードのトラフィックが成長する中、これをマネタイズする方法として真っ先に考えられるのはやはり広告配信ビジネスだろう。いわゆるRSS広告である。主要プレイヤーとしては、2007年にグーグルに買収されたフィードバーナー、ngi group傘下のRSS広告社、そして米国ベンチャーのPheedoのライセンスとして営業するトランス・コスモスなどがある。

RSS広告には、フィードのエントリー内(一つひとつの記事の中)に画像バナーを挿入して配信するインライン式と、数本の記事の合い間に広告のみのエントリーを挟んで配信するスタンドアロン式の2つがある。

フィードリーダーの多くはどちらの形式であっても広告を表示することが可能だが、インライン式の場合は画像バナーを表示できないか、あえて表示させないようにしているフィードリーダーもある。特に、表示画面の小さな携帯電話用のフィードリーダーでは画像バナーをインラインで表示する意味がないので、スタンドアロン型が主流になる可能性が高い。プロの編集者が制作したペイドバブ(記事広告)は、スタンドアロン型と親和性が高く、ユーザーにとっても有用なコンテンツになりえる。

市場関係者数名に問い合わせたところ、2008年度のRSS広告市場は10億円を突破するとの見方が有力のようだ。フィードバーナーがグーグルの一部門となることにより、RSSフィード版のAdSenseやAdWordsの登場も間近と思われる。また、RSS広告社も、国内ブログ最大手のア

RSS フィードの ビジネス最新動向

るサービスである。フィードのアグリゲーターの一つと言ってよいが、アグリゲート(集約)可能なフィードの対象サイトが群を抜いて豊富なのが特徴だ。

その主な機能を以下に挙げる。

- 1) 複数のサービスのフィードを読み込むと同時に利用ユーザー同士でコメントを書くことができる。
- 2) 次のソーシャル機能を持つ。
 - ・ユーザーのグループ化
 - ・友人のRSSフィードの一括管理
 - ・集めたフィードの一覧の外部公開
- 3) ブログパーツを生成できる。

いまのところ、日本の代表的なSNSであるmixiやGREEがフィードを配信することはないが、米国では急成長中のFacebookや、ビジネスSNSの代表であるLinkedInはRSS対応しており、オープン化が進んでいる。

また、日本ではマイクロブログ(またはミニブログ)と呼ばれることが多いTwitterやTumblrなど、ウェブ上にユーザーの現在の興味やプレゼンスを随時公開するのに便利なサービスが普及してきた。RSSフィードは、このようなさまざまなサービス群にまたがって、友人の行動をウォッチしたり関心のあるニュースをトレースしたりするための最適なフォーマットとして、盛んに用いられるようになっている。

とはいえ、マネタイズの決定打となる方法はいまだに確立されておらず、当面は限られた広告売り上げに依存する状態が続くと思われる。

雲の合い間から稲妻が走る日

フィードのトラフィックを効果的にマネタイズするためのビジネスモデルの確立には、まだ多少の時間がかかるかもしれない。しかし、いったん火がつけば爆発的な勢いで拡大しそうな環境が整いつつある。それは、クラウドコンピューティングと呼ばれる、ポストウェブ2.0的なコンピューティング時代の到来である。

米国では、フェースブック社が2007年6月に発表した新しい戦略「Facebook Platform」によって、Facebook上でユーザーがアプリケーションを開発したり、そのアプリケーションをユーザーに公開したりすることができるようになった。具体的には、必要なAPI(Application Programming Interface)を開発者に公開することで実現している。この戦略は世界に波紋を呼び、グーグルのOpenSocialのような、ネット上のコンテンツやプレゼンスを共有化していくための新たなフォロワー戦略を生み出すことになった。

インターネットの1つのアプリケーションサービスの上で、さらに異なるアプリケーションを動かす。動かすだけではなく、新しく開発するための仕組み(API)を提供する。これは、2008年現在、クラウドコンピューティングと呼ばれるようになっているサービスだ。セールスフォース・ドットコムは同じ仕組みをPaaS(プラットフォーム・アズ・ア・サービス)と呼び、ネットスケープの創業者として名高いマーク・アンドリーセンらは単にプラットフォームと称しているが、これらはほぼ同義である。ただ、クラウドコンピューティングという呼称が影響力の大きいグーグルによって作られたことから、いずれこの呼び方に統合されるかもしれない。

クラウドとは雲のことだが、ここでは、ウェブ上に用意された開発環境と、そこで作られたアプリケーションを動かすための実行環境の両方を指す。Facebook Platformの場合は、開発されたアプリケーションはFacebook上でしか動かないが、グーグルやアマゾンが提供するクラウドで作られたアプリケーションは、クラウドに対応するさまざまなサービス環境で動作させることが可能だ。

マーク・アンドリーセンの言葉を借りれば、アプリケーションを動かせる環境、つまりさまざまなウェブサイトやサービスを、コンテナと呼ぶ。一般的なウェブサイト上で作られるアプリケーションはHTMLとJavaScriptだけで動作する。これらはウィジェットに近いものと言えるだろう。

ウェブサイトで呼び出されるコンテンツの多くはRSS化していく可能性が高い。ウェブサイトというHTMLベースのコンテナは、いずれは分散型の複数のウィジェットの組み合わせによって構成されていくのではないだろうか。それぞれのウィジェットがJavaScriptを使って呼び出せるのはRESTやJSONPなどのウェブサービスと、RSSフィードによるデータコンテンツである。すなわち、今後のウェブサービスの形態は、HTML、JavaScript、各種のウェブサービスとRSSフィード(RSS自体が一種のウェブサービスであるが)という組み合わせになっていく。ハイブリッドなウェブの時代が到来すると言っていいだろう。

クラウドコンピューティングの普及に伴い、雲の中の稲妻のように、RSSフィードのトラフィックが存在感を増すことは間違いない。このハイブリッドウェブに対応するために、多くのウェブサイト運営者は、今後数年以内に自社サイトをRSSフィードに対応させる必要に迫られるはずだ。上場企業のウェブサイトのほとんどがRSS対応になるのも時間の問題である。そして、その過程において、RSSフィードのビジネス市場にも、ようやく大きなチャンスが訪れるだろう。



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、データ、URL、名称など）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真・図の作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D（初期は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp